

眼科学学校健診で眼底検査をすべきか？ アンケート調査報告

秋田県眼科医会／ゆざわ眼科医院

高木 武司

秋田県眼科医会会長／吉本眼科医院

吉本 弘志

目的

平成22年に日眼医が行った全国調査では、学校健診時に、直像鏡および倒像鏡を持参する眼科学学校医は、それぞれ12%、20%であることが判明し、実際に検診時に眼底を診ているものと推察される。検診時に、網膜剥離の手術既往や未熟児網膜症の既往のある児童生徒に関して、養護教諭より、生活指導上の留意点を質問されることが稀にある。また養護学校の検診時には、眼底病変を有すると推定される児童生徒に遭遇する（表1）。今回、秋田県眼科医会の当該会員を対象として、主として眼科学学校健診時の、眼底検査に関するアンケート調査を行ったので報告する。

表1 秋田県南の養護学校の検診時に経験した眼底病変を合併しうる原疾患

原疾患	眼底病変
Waardenburg 症候群	白子眼底
アンジェルマン症候群	脈絡膜低色素
Sturge-Weber 症候群	脈絡膜血管腫
神経線維腫症	視神経膠腫
結節性硬化症	過誤腫
水頭症	乳頭浮腫

方法

平成25年2月に、眼科学学校健診を委託されていると推定した、秋田県眼科医会A会員全員と一部のB

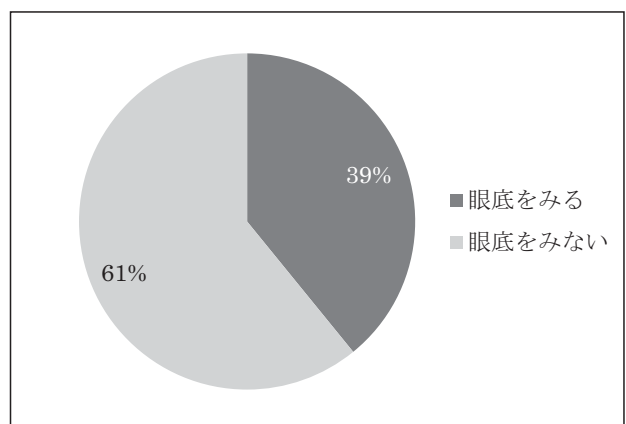
会員、計66名を対象に、担当校数、健診時の検査項目、眼底検査施行の有無、眼底検査の道具、眼底検査を行うことへの賛否、眼科学学校健診に関する意見などを、無記名で問うたアンケート用紙を、郵送した。

結果

57名から回答を得た。（回収率86%）担当校ありが46名、担当校なしが11名であった。担当校ありの46名のうち、実施している検査項目は、眼位：46/46名（100%）、前眼部：45/46名（98%）、眼球運動：19/46名（41%）、他覚的屈折検査：4/46名（9%）、眼底検査：18/46名（39%）であった（図1）。眼底検査を実施している18名のうち、倒像鏡使用が11名、直像鏡使用が3名、直、倒像鏡併用が2名、無回答2名であった。眼底検査の実施対象は、17名が抽出、1名が全員（高校1年）であった。

健診時に眼底検査を行うことに賛成と回答した方

図1 眼底検査の実施割合



は17/46名（37%）で、17名全員が、対象を眼底疾患の既往がある例や、視力低下例などに限定、抽出して行うべきとの回答であった。眼底検査を行うことに反対と回答した方は29/46名（63%）で、その理由として、時間的な制約、明室での眼底検査の正確性への疑問、検診マニュアルにないこと、発見できる病変の頻度が低いことが挙げられた（表2）。

表2 眼底検査を行うことに反対する理由

理由	回答数
正確な所見がとれない	13
時間的に制約がある	4
健診項目にない	4
異常発見の頻度が低い	2
その他	1

考 案

児童生徒の健康診断マニュアル（改訂版、第4版）によると、眼科健診では、前眼部、眼位（眼球運動、輻輳を含む）が検査項目となっている。今回の調査では、マニュアル外に眼底検査を行っている眼科学校医が、3割以上いることがわかった。ほとんどが健康調査票から、眼底疾患の既往がある例や眼底疾患を疑った例、視力の極端な左右差がある例、外斜視例などを、検診時に抽出して、明室、無散瞳で行っていると考えられる。

その一方、眼科学校医の6割以上は、眼底検査を行うことに、反対ないし否定的な意見をもっていることもわかった。その主な理由は、たとえ抽出例でも、明室において無散瞳で眼底後極部のみをみても、正確な所見が得られるとは限らず、「異常なし」と確信を持って言えないためとの回答であった。

表3 旧湯沢市内中学校2年生で視神経乳頭陥凹拡大が認められた割合

学校名	健診生徒数	C/D 比拡大例
S 中学校	14	0
M 中学校	110	4
Y 中学校	26	2
K 中学校	96	4
計	246	10

学校健診は、疫学統計をとる上で便利であり、一例として、秋田県湯沢市の中学2年生では、乳頭陥凹拡大を呈する生徒が4%いることが分かった（表3）。テーマを決めてもらえれば、眼底検査に協力するという会員もいるため、今後の検討課題としたい。

現状では、学校健診時の眼底検査を実施するか否かは、個々の眼科学校医の裁量、判断に任されており、強制も否定もすべきものではないと考えられた。